



## コロナ後の社会を考える ― まとめ

これまで、『コロナ後の社会を考える』として全6回のシリーズで、新型コロナウイルスによる消費者の生活意識や行動への影響とその変化について、各界の専門家の方々に様々なご意見を伺って参りましたが、最後に、その内容を振り返りながら全体をまとめていきたいと思います。

なお、本稿は互助会保証㈱の委託事業として、(一財)冠婚葬祭文化振興財団・冠婚葬祭総合研究所が企画運営しているものです。

このシリーズでお話を伺った皆様を改めてご紹介させていただきます。

- 第1回：山田 昌弘 先生 中央大学文学部教授（家族社会学）
- 第2回：清水 聡 先生 慶応義塾大学商学部教授（消費者行動論）
- 第3回：三浦 麻子 先生 大阪大学大学院人間科学研究科教授（社会心理学）
- 第4回：宮木 由貴子 様 株式会社第一生命経済研究所ライフデザイン研究部
- 第5回：荒瀬 光宏 様 株式会社デジタルトランスフォーメーション研究所
- 第6回：藤山 浩 様 一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所

各界の最前線で意欲的なご研究・ご提言をされている先生方だけあり、お話の内容も非常に示唆に富み、興味深い内容でした。

皆様からお話し頂きました内容を、以下の3点についてまとめてみました。

1. コロナによってもたらされた、生活・社会の変化とは？
2. “人と人との関係性”に起こっている変化とは？
3. 冠婚葬祭業の将来像とは？

## 1. コロナによってもたらされた、生活・社会の変化とは？

新型コロナウイルスの蔓延によって、マスクの着用や様々な行動規制、集会や会合の制限を余儀なくされ、人々の生活はそれ以前とは様変わりしてしまいました。その一方でオンライン会議を始めとしたデジタル技術の進展など、社会を取り巻く環境も大きく変化しているように感じます。

しかし、今回お話をお伺いした先生方の印象としては「**コロナによって変化が起きたというよりは、それ以前に起こっていた現象が、コロナによってより加速された**」と捉えていらっしゃる方が多かったのが印象的でした。これまで緩やかに起こってきた社会や生活、経済の変化が、コロナ社会によってより顕著になり、変化が加速されたというご意見が多くみられました。

また、特徴的であったのは、「**コロナによって、これまで当たり前だった形式や習慣の必要性が見直された**」というご指摘でした。

コロナ社会においては、あらゆる移動・行動に感染リスクが伴ってしまう中で、どうしても行動の“選択”を迫られる局面が多くなりました。それは通勤、会議、会合、買い物、飲み会といった日常の場面から、冠婚葬祭を始めとする儀式や年中行事など、これまで何の疑問も抱かず当たり前に行われていた行動にも向けられていきました。

このような局面の中で、その行動は（行動に伴う感染リスクと比較して）本当に必要なものなのか、他の手段で代替できないものか、という選択が常に行われるようになりました。

その結果として、その人にとって本当に必要で、意義のあると思われる行動は、デジタルを含めて手段も豊富化されていきましたが、そうではない行動は自粛、制限の対象になっていきました。特に、その意義や目的がみえにくくなっていた形式的・習慣的な行動は、逆に「コロナだから」という“やらない理由”が言いやすくなったこともあり、より選択されない傾向が強まっていったことができます。

## コロナによってもたらされた、生活・社会の変化とは？

<p>家族社会学 山田 先生</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 経済的理由による結婚回避の傾向が強まる (少子化の加速の懸念)</li> <li>・ 在宅の中で、夫婦のコミュニケーションの欠乏傾向が改めて顕在化</li> <li>・ 形式、世間体に基づく行動に、「やらない理由」が与えられる</li> <li>・ 「形」から「気持ち」を重視する流れ</li> </ul>
<p>消費者行動論 清水 先生</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 買い物の回避が減り、買い物の場所を絞る</li> <li>・ 信頼できるものを選ぶ傾向が強まり、無駄な買い物をしなくなる</li> <li>・ 「無駄」と判断された行動は、コロナが落ち着いても戻らない</li> <li>・ あらゆる局面で「多様化」が広がっている</li> </ul>
<p>社会心理学 三浦 先生</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コロナ前後で、社会心理としては大きな変化はみられない</li> <li>・ 初対面や関係性を強化する段階での行動は、特にコロナの影響を受けている</li> <li>・ 機会が“奪われている”という意識がある内は、それを希求する心理は強い</li> </ul>
<p>第一生命 経済研究所 宮木 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「お金」「健康」「つながり」の領域において、二極化が強まる</li> <li>・ デジタルトランスフォーメーションが生活の変化に大きく関わる</li> <li>・ コロナの中での一番大きな発見は、「幸せは日常生活の中にある」ということへの気づきだった</li> </ul>
<p>デジタルトランス フォーメーション 研究所 荒瀬 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コロナによってデジタルに触れる場面が増え、より社会のデジタル化が加速</li> <li>・ 旧来やってきたことの中に、実はやらなくてもよいことがみつかった</li> <li>・ デジタルの便利さを体感することで、他の場面のデジタル化したいという欲求が高まる</li> </ul>
<p>持続可能な地域 社会総合研究所 藤山 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大都市に特に深刻な影響 (大規模集中による弊害)</li> <li>・ 「循環革命」と「人生100年時代」による変化がより加速する</li> </ul>

## 2. “人と人との関係性”に起こっている変化とは？

コロナに限らず、昨今の社会・生活・経済において、人と人との関係性に関して起こっている動向についてのご意見を次のページにまとめました。

昨今、様々な事件や社会動向をみても、人と人との関係性が希薄になってきているのではないかという感覚があります。冠婚葬祭は人と人との関係性の間に成り立っている行事ですので、こういった人と人との関係性の変化は敏感に捉える必要があります。

今回先生方のご意見をお伺いして抱いた印象としては、**人と人との関係性が「希薄化」しているというよりは、「多層化」している**ということ です。

これまでの社会にみられたような近所づきあいや親戚関係などはだんだん薄くなっている印象がありますが、それは「人と人との関係性（を求める心理）が弱くなっている」ということではなく、構築する人間関係の対象がより広範囲に広がってきているということです。

その傾向はデジタルの進展、特にSNSの浸透がより加速させているという面もあります。人間関係構築の手段がリアルだけでなくデジタルにも広がっているということが、人間関係の多層化をより進展させていると言えます。

しかしながら一方で、この「人間関係の多層化」という傾向は、前項の「形式的・習慣的なものの必要性の見直し」というコロナの影響と重なり、自分にとって本当に必要な人間関係が見直されることにもつながっていると考えます。

また、多層化によって生じる人との関係性は、必ずしも「人が集まること」や「対面」を原則としないために、そうした機会が相対的に減少する傾向にあり、これまでの冠婚葬祭で行われてきた「人の集まり」や「対面」による関係性は、その必要性を認識しづらくなっているように思います。冠婚葬祭業としては、こうした状況にどのように対応していくかが問われていると考えます。

## “人と人との関係性”に起こっている変化とは？

<p>家族社会学 山田 先生</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世間体を気にする傾向は依然強いが、「世間体」の対象が、親戚・ご近所の目から友人・会社の同僚に変化。SNSによってその傾向はより顕著に</li> <li>・一方で、世間体を気にするものの、もはや世間体を気にしてられない、という層も増えてきている</li> </ul>
<p>消費者行動論 清水 先生</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知的好奇心旺盛で、「デジタルの必要性も高い元気な高齢者が増えている</li> <li>・元気な高齢者は情報発信力も強く、「文化」を伝えていってくれる</li> </ul>
<p>社会心理学 三浦 先生</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ社会での行動が“当たり前”になった時に、人間関係の「標準」が変わる可能性がある</li> <li>・SNSの浸透もあり、人間関係の成分が変わってきている。親しい人がそうでないかだけではなく、その中間の関係性の割合が増加</li> </ul>
<p>第一生命 経済研究所 宮木 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デジタルの進展によって、人間関係が個別化し孤立化が進むだろうという見方もあったが、今ではつながりが多様化することによって、むしろ強くなっていくという見方が一般的</li> <li>・“つながり”とは“面倒くさい”ということも含めて、その有用性が認識される必要がある</li> </ul>
<p>デジタルトランス フォーメーション 研究所 荒瀬 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リアルとデジタルの世界は二者択一ではなく、それぞれに強み弱みがある。その両方を必要に応じて使い分けられるようにデザインすることが重要</li> <li>・多くの産業において「商圏(地理的条件)」は重要な要因だが、オンライン化することによって、地理的条件が重要な要因ではなくなる</li> </ul>
<p>持続可能な地域 社会総合研究所 藤山 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろなものが効率化され、今だけ、自分だけ、お金だけに流れた結果、地域に記憶と風景を世代に引き継ぐということが非常に劣化した</li> <li>・家族・親戚や近所という関係性だけではなく、テーマ・コミュニティ(趣味や興味関心に基づくコミュニティ)のつながりは広がっている</li> <li>・若い人の方がよっぽど利他的で、他者とのつながりを持つとしている</li> </ul>

### 3. 冠婚葬祭業の将来像とは？

各先生のご見識の中で、昨今の動向が冠婚葬祭業に与える影響や、冠婚葬祭業の将来像に対するイメージなどのご意見を、次のページにまとめました。

どの先生方も強調されていたのは、**冠婚葬祭は将来においても重要で、必要とされている営み**だということです。しかしながら一方で、これまで当たり前だった行動や習慣が見直される傾向がある中で、このままだと必要性のないものだと選別されるリスクを抱えているのも事実で、この大きな社会変革の時代を迎え、**その「本質」をもう一度見直す必要がある**という認識もまた、各先生方に共通した見解でした。

冠婚葬祭は人と人とのつながり、ひいては幸せにつながる大事なセレモニーですが、一方でその参加する側の意識や、その形式などもある程度定型化され、習慣化されている側面もあるといえます。しかし、人と人との関係性は多層化が広がり、祝う人－祝われる人、送る人－送られる人の関係性も変化してきました。

「祝いたい」「送りたい」という冠婚葬祭の本質に、冠婚葬祭の産業・サービスとしてどのように応えるべきか。その姿勢が問われていると感じます。

またそこには、冠婚葬祭業としてデジタルにどう向き合うか、という問題も大きく関わってきます。デジタルは効率化・高速化だけの手段ではなく、多数のニーズの中からカスタマイズし、最適化させるということを得意とする技術でもあります。リアルを得意とする冠婚葬祭業にデジタルの強みを生かすことで、より参加者の本質的なニーズに応えることができる可能性も感じます。

新型コロナウイルスによる社会の変化は、多くの産業と同様に、冠婚葬祭業においても大きな影響を与えました。しかし、大きな変革は同時に大きな機会でもあります。今後冠婚葬祭業の皆様がこの機会を、将来に向けた好機に変えられることを期待しております。

## 冠婚葬祭業の将来像とは？

<p>家族社会学 山田 先生</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・冠婚葬祭はこれからも、人とのつながりを大事にする気持ちを表明する場として、生き残っていく</li> <li>・近所・親戚だからという形式に則ることではなく、その人を祝いたい、送りたいという参列者の気持ちに寄り添うことが大事</li> </ul>
<p>消費者行動論 清水 先生</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・冠婚葬祭は「文化」であることを発信することが重要</li> <li>・「人にとっての死とは？」「結婚とは何か？」のような根源的なところから、生活に根差してきた背景までをわかりやすく発信する必要がある</li> </ul>
<p>社会心理学 三浦 先生</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「幸せになってね」や「ありがとうございます」という気持ちを直接伝える場は非常に大事で、その時に物理的な空間を共有する意味は必ずある</li> </ul>
<p>第一生命 経済研究所 宮木 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・冠婚葬祭が、誰かと自分の幸せを実感できる場となっていくことが重要</li> <li>・「利己としての利他」（誰かに喜んでもらえることが自分の幸せ）という感覚を、冠婚葬祭のようなセレモニーを通じて感じてもらいたい</li> </ul>
<p>デジタルトランス フォーメーション 研究所 荒瀬 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・冠婚葬祭のあり方はリアルな文化の中で既に確立されているもので、それをそのままデジタルに変えようとすると、非常に味気ないものになる</li> <li>・冠婚葬祭の「根本の価値」が何かということをしっかり考える必要がある</li> <li>・根本の価値を見据えた上で、デジタルを活用してニーズを拾い上げ、リアルなサービスを提供する手段を組み合わせることで、最適な価値が提供できる</li> </ul>
<p>持続可能な地域 社会総合研究所 藤山 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・葬儀は、その人がどんな人生を過ごして、どんな記憶と風景を残したかを伝える場になるべきで、その意味で冠婚葬祭業は情報産業になるべき</li> <li>・効率化優先でルーティンな葬儀と、テーマ・コミュニティに基づき、その人と送る人の人生に寄り添う“偲び会”を組み合わせる</li> <li>・自治体や社会福祉協議会とも連携し、地域のコミュニティづくりに取り組むことが、地域活性化につながり、そのことが実は経済合理性もある</li> <li>・冠婚葬祭の「何にお金をかけるか」は、改めて再構築される必要がある</li> </ul>